

松岡城下における武家屋敷地の分布* 松岡藩士とその屋敷地の研究 その1

伊豆蔵 庫喜^{*1}, 吉田 純一^{*1}, 多米 淑人^{*2}

Distribution of the Samurai Residences in the Matsuoka Castle Town A Study on the Samurai's Premises in the Matsuoka Clansman, part1

Kouki IZUKURA^{*1}, Junichi YOSHIDA^{*1} and Yoshihito TAME^{*2}

^{*1} FUT Fukui Castle and Castle Town Research Laboratory

This paper considers the distribution of the Samurai residences in Matsuoka Castle Town. The Samurai residences were arranged around the palatial residence of the feudal lord in Matsuoka Castle Town. A large site was given the *Bangai Clansman* of the first-class retainer near a palatial residence. The residence of the *Bangumi Clansmen* was arranged outside of the residential area of the *Bangai Clansmen*. As a thing and social position and the salary that a township was divided into by family status and social position became only low, in Matsuoka Castle Town, the tendency to become small was common to the premises with Fukui Castle Town.

Key Words: 松岡城下, 武家屋敷地, 番外藩士, 番組藩士, 居住区, 分布

1. はじめに

松岡藩は、正保2年(1645)に福井藩4代藩主松平光通の異母兄弟であった昌勝(3代忠昌の長男)が、吉田郡など7郡5万石を分知されて成立し、その子昌平(後、福井藩9代藩主宗昌)が享保6年(1721)に福井藩を継承し廃藩になるまで76年間存在した福井藩の支藩である。正保3年(1646)には、昌勝付きとして40名余の福井藩士が出向を命じられている。その後、慶安2年(1649)には松岡で屋敷割が行われ、藩士の居地および藩士に従属する足軽、中間、徒歩などの居所も整備されている⁽¹⁾。本研究は福井藩の支藩である松岡藩の藩士に着目し、松岡城下における武家屋敷地の分布や屋敷割および個々の屋敷地の位置や大きさについて検討するとともに、享保6年の福井藩への併合に伴う松岡藩士の推移や福井城下における拝領地に関しても考察する。本稿はその第1報として、延宝4年(1676)の『松岡様御給帳』⁽²⁾(史料1)や正徳4年(1714)の『松岡家中絵図』⁽³⁾(史料2)を用いて、松岡城下における武家屋敷地の分布について考察する。なお、松岡城下の武家屋敷については、史料2の城下図に記載されている127筆を検証する。

2. 松岡藩士について

2.1. 家格と役職, 禄高

延宝4年(1676)頃の松岡藩士の数は、島田和三郎家所蔵の『松岡様給帳』で確認でき、医師や諸役などを含めると189名である。このうち164名が士族にあたり、家格別にみると番外は40名、これに次ぐ番組が124名である。それ以外は、番組医師が12名、番組医師が6名、諸役が7名である⁽⁴⁾。これら189名の屋敷地の中で、正徳4年の『松岡家中絵図』に対照できるのは、124名である。

* 原稿受付 2019年3月29日

^{*1} FUT 福井城郭研究所

^{*2} 工学部 建築土木工学科

E-mail: kouki-i@fukui-ut.ac.jp

2.2. 番外藩士

松岡藩の番外40家は、おおむね3段階に区分できる。このうち「家老・城代」に就ける家は、中根勲負家、秋田八郎兵衛家、明石縫殿家、松原郷右衛門家、雨森傳右衛門家の5家のみである。

これに次ぐ「番頭・奏者・寺社奉行」に就くことができるのは、渋谷弥祝家や磯野多宮家など10家である。それ以外の浅井源左衛門家や雨森新七家など25家は「算奉行・目付・徒頭・膳番」などの職に就ける。

禄高は、家老・城代の5家は、中根家の500石、他の4家はいずれも400石である。これに次ぐ、番頭・奏者・寺社奉行の10家は、渋谷家が300石で、それ以外の9家は200石～250石である。一番下位にあたる算奉行・目付・徒頭・膳番に就ける家は100石～200石である。ところで、本藩福井藩（25万石）においては、上級藩士の大半の家が1000石を超える禄高を有しており、100石～200石の藩士は中級武士にあたる⁶⁾。

2.3. 番組藩士

番組の124家は、家格や禄高によって2段階に区分される。例えば、伊藤十之進家や猪子三郎左衛門家ら20家が「中頭・奥小姓・祐筆」に就け、それ以外の104家は御代官や作事奉行および台所頭などの職に就いている。

禄高についても番外と番組ではかなりの格差がみられ、中頭・奥小姓・祐筆に就ける伊藤十之進家や猪子三郎左衛門家ら18家がおおよそ100石～250石であるのに対して、御代官・作事奉行・台所頭に就ける栗田七郎右衛門家や村尾武太夫家など104家は50石以下の家が多い。

2.4. その他

以上164家の士族のほか、細井玄春や引間玄節など「番外医師」が12名、原田元隆や栗崎啓祝など「番組医師」が6名、森崎惣右衛門や松下文右衛門ら「諸役」が7名である。

3. 松岡城下の武家屋敷地について

正保2年に成立した松岡藩は、福井城下の北東約8kmに位置する九頭竜川中流域の芝原江上村に藩庁を定め、この地を松岡と称した（図1）。『片叢記 中』によると、慶安元年（1648）に藩主の御館を置くことを定め、5年後の承応2年（1653）には幕府から御館の造営は勝手に行つてよいとの許可が下りている⁶⁾。そして、承応3年（1654）に初代昌勝が江戸より松岡に入部している。

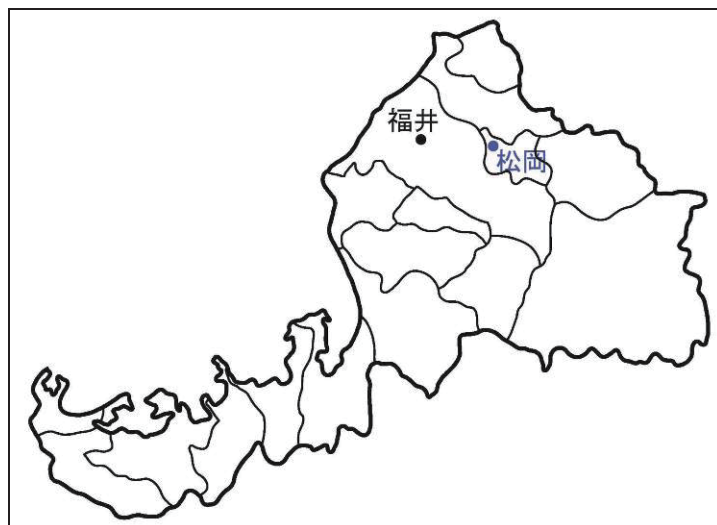


図1 松岡城下の位置

松岡藩士の屋敷地に関する初見は、『片聾記(中)』の慶安2年(1649)9月条の記述で、家老の磯野石見や蛭川孫之丞ら50名の姓名ならびに各屋敷地の間口と奥行が記されている。したがって、松岡藩士の屋敷割は藩が成立した正保2年以降、慶安2年までの4年間で行われた可能性が高い。

3.1. 城下絵図にみる城下の様子

松岡城下を描いた城下図は、表1に示す4図である。正徳4年の『松岡家中絵図』(以下、①図)と享保10年(1725)の『越前国松平千次郎領分 松岡家中絵図』(以下、②図)と享保期(1716~1736)の『松岡家中絵図』(以下、③図)の3図は、いずれも通りや土居、堀が精細に描かれており、武家屋敷地をはじめ足軽や中間などの組屋敷や町人地、寺社地が区分されている。なかでも、①図は屋敷地1筆ごとに境界線が書き込まれ、個々の屋敷地の居住者、間口と奥行の間数が詳細に記されている(図2)。

②図は表書に「享保十巳年十月日」とあり、享保10年(1725)10月に作成されたと考えられる。②図は「家中屋敷」が青色で示され、1筆ごとの境界線も書き込まれている。しかし、①図にみられる各屋敷地の居住者名や間口、奥行の表記はなく、家中屋敷と組屋敷は同じ青色であり、明確な区分はされていない。

③図には年記はないが、先の②図と比べると、屋敷割の状態や家中屋敷と組屋敷が色分けされていないことなど共通点が多く、②図と同じ享保10年頃の松岡城下を描いたものとみてよい。③図もやはり屋敷地1筆ごとの居住者や間口、奥行の表記はみられない。以上、①図~③図は、いずれも2代藩主昌平時代のもので、初代昌勝時代の城下図は見当たらず、城下創設当初の町割や屋敷割の状態を確認することはできない。

一方、④図の『松岡御家中絵図』は『片聾記(中)』に所収されている。添書きに「松岡御家中之図 地図文政三辰年春 横井三郎右衛門ヨリ借用シテ 寫セシヲ松岡御代々書ニ寫加 ヘル別ニ式枚寫シ置シ事ナレ ドモ此図ヲ本トス 干時慶応元丑年八月晦日寫之 山崎七郎右衛門英常」とあり、慶応元年(1865)に福井藩士の山崎七郎右衛門英常が、文政3年(1620)春に横井三郎右衛門から借用していた絵図をもとに写したものである。さらに、④図は区画ごとに藩士の姓は書き込まれているが、各屋敷地には境界線や間口、奥行の表記はなく、見取り図程度の精度である。

表1 主な松岡城下絵図(一覧)

番号	年代		絵図名	所蔵	原図/ 写図等	法量 (cm)	
						縦	横
①	正徳4年	1714	松岡家中絵図 (松岡御城下絵図)	福井県文書館 松平文庫	原図	391	220
②	享保10年	1725	越前国松平千次郎領分 松岡家中絵図	福井県立図書館 松平文庫	原図	154	152
③	享保年間	1716~ 1736	松岡家中絵図	福井県立図書館 松平文庫	原図	175	303
④	年代不詳		松岡御家中絵図	片聾記中巻 所収	写し図		

図2は正徳4年の『松岡家中絵図』(①図)を示したものであり、北に九頭竜川が東西に流れ、東から南にかけては山々が連なっている。藩主の御館(図中、御屋敷とある。)は城下のほぼ中央部に東面し、周囲は土居と堀が囲んでいる。敷地は東西約200m、南北約140mの矩形で、坪数はおおよそ7780坪である⁹⁾。

武家屋敷地は御館を囲むように東、南、西に配され、武家地の外側に設けられた土居や堀によって町人地と区分されている。御館の南側に大名町、その東側に代官町などの武家町が設けられている。武家屋敷地の外側には、福井と勝山を結ぶ勝山街道が東西方向に延び、街道に沿うように帯状に町人地が配されている。さらに、町人地の外側には足軽、中間や徒士などの組町のほか、円成寺や天龍寺、春日社などの寺社が置かれている。なかでも、城下の西南隅の一画は寺院が集められ、寺町が形成されている。

一方、城下西端にも一部武家屋敷地が確認できる。この一画は町人地を隔てる土居や堀の外側にあり、絵図に新町と記されていることから、後世に新設された武家町と思われる。



図2 正徳4年(1714)『松岡家中絵図』 (福井県立図書館保管, 「松平文庫」蔵)

3.2. 屋敷地の分布

図3は、図2の正徳4年の『松岡家中絵図』(史料2)を基に、屋敷割や通り、居住区などを書き起こしたもので、便宜上、各屋敷地に記号や番号を付けている。本研究では、松岡城下の武家屋敷地を図3に示すように、町や居住区ごとにA区(中心部)、B区(周辺部)、C区(新町)の3区に分けて考察する。

図3において、屋敷地が特定できるのは絵図にみられる127筆である。127筆の居住者、間口と奥行の間数および坪数を提示したものが表2である。このうち101名は、家格、役職や禄高が、『松岡様御給帳』で確認でき、これについても表2に示している。なお、図3の記号や番号は表2と対応している。

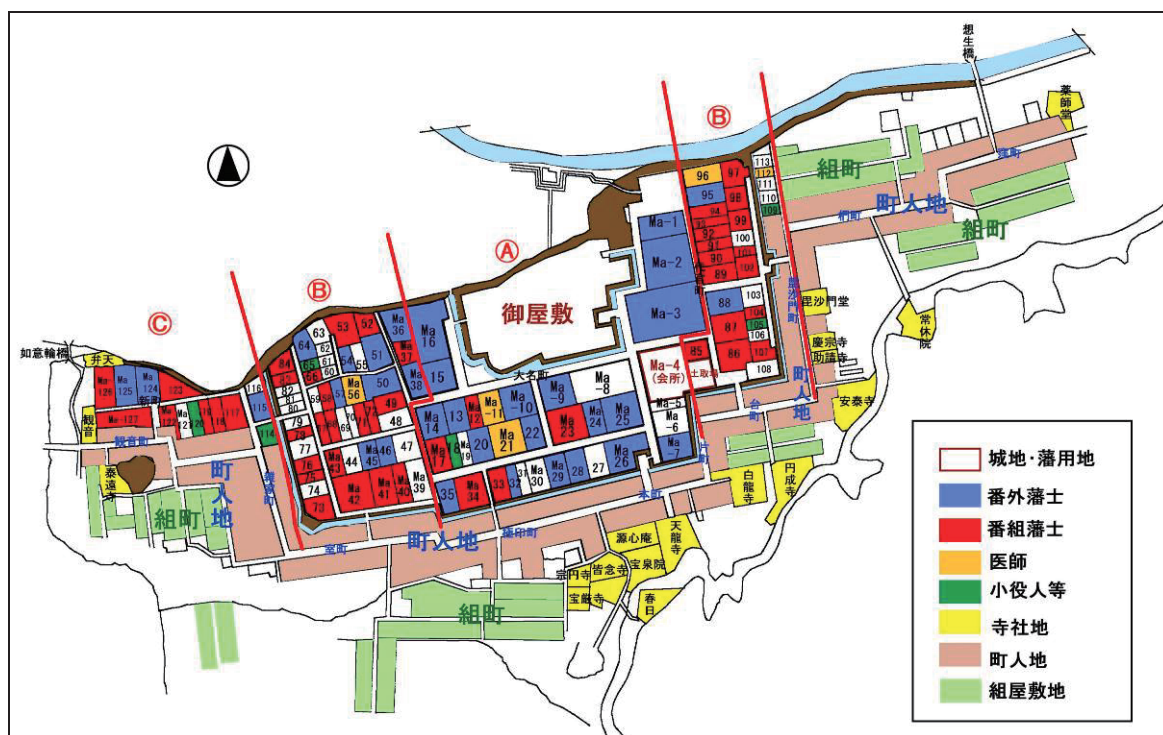


図3 正徳4年の松岡城下の屋敷割 (史料1『松岡家中絵図』を基に作図した)

表2 正徳4年の絵図にみられる屋敷地の居住者と規模および家格、役職と禄高（その1）

区画	屋敷地番号	正徳3年(1713)	家格	役職	禄高	間口 (間)	奥行 (間)	坪数 (坪)
		氏名						
A	Ma-001	磯野多宮	番外		250	16	32	512
	Ma-002	渋谷弥税	番外		300	36	34	1224
	Ma-003	中根勲負	番外	家老	500	35	50	1750
	Ma-004	会所				44	33	1430
	Ma-005	空地				8	25	200
	Ma-006	蛭川権九郎				26	25	650
	Ma-007	津田与三左衛門	番外	算奉行	200	20	25	500
	Ma-008	白石要人				44	25	1100
	Ma-009	秋田八郎兵衛	番外		400	13	25	325
	Ma-010	明石縫殿	番外		400	24	25	600
	Ma-011	細井玄春	番外医師		200	■	25	
	Ma-012	佐野内半治	番組	定江戸	20石5人扶持	10	25	250
	Ma-013	浅井源左衛門	番外	算奉行	200	16	25	400
	Ma-014	前波丹下	番外	御膳番	100石3人扶持	20	25	500
	Ma-015	蛭川七郎兵衛	番外	御奏者	200	23	20	460
	Ma-016	松原郷左衛門	番外		400	46	24	1090
	Ma-017	蘭田七郎	番組	中頭	100	14	25	350
	Ma-018	生駒比箇	御徒	御奏者兼江戸御用多取	200	8	25	200
	Ma-019	樋口養心				8	25	200
	Ma-020	横田兵蔵	番外	御目付	200	16	25	400
	Ma-021	引馬玄蕃	番外医師	番外医師(針)	25石5人扶持	22	25	550
	Ma-022	雨森新七	番外	算奉行	200	17	25	413
	Ma-023	奈良助左衛門	番組		150	16	25	400
	Ma-024	青山登	番外	御奏者兼御小姓支配	200	14	25	350
	Ma-025	雨森傳右衛門	番外	御城代	400	26	25	650
	Ma-026	秋田勘解由	番外		250	20	25	500
	Ma-027	沢木伴蔵				24	25	600
	Ma-028	久世少吉	番外	御徒頭	100	14	25	350
	Ma-029	出浦宮内左衛門	番外	御持筒頭	200	24	25	600
	Ma-030	荒井作野右衛門				24	25	600
	Ma-031	山田安之丞				8	25	200
	Ma-032	磯野無二	番外	御普請奉行	100	8	25	200
	Ma-033	木村丹治	番組		25石4人扶持	12	25	300
	Ma-034	栗田七郎右衛門	番組	御武具奉行	20石5人扶持	20	25	500
	Ma-035	土屋小弥太	番外	御先物頭	200	14	25	350
Ma-036	片山与三右衛門	番外	無役	200	34	19	646	
Ma-037	小林品右衛門	番組		25石5人扶持	10	19	190	
Ma-038	小林久兵衛	番外	御旗奉行	150	25	19	475	
Ma-039	村田安左衛門				25	26	650	
Ma-040	吉岡伝吾	番組		20石4人扶持	12	26	299	
Ma-041	三岡数馬	番組	中頭	100	15	26	390	
Ma-042	久津見記内	番組		20石10人扶持	13	20	250	
Ma-043	筒井左内	番組	御小姓	20石4人扶持	12	20	240	
Ma-044	伴郡治				13	20	250	
Ma-045	久津見多忠	番外	無役	100	22	26	581	
Ma-046	丹波八郎	番外	御目付	200	12	20	240	
Ma-047	左近士新五右衛門				20	18	360	
Ma-048	青木春宗				24	23	552	
Ma-049	高橋又左衛門	番組	御代官	20石4人扶持	14	23	322	
Ma-050	佐々木小左衛門	番外	寺社町郡奉行	200	18	28	490	
Ma-051	中川主膳	番外	御番頭兼御奏者	250	24	20	480	
Ma-052	小川又左衛門	番組		20石5人扶持	■	■		
Ma-053	吉田猪太夫	番組		20石5人扶持	20	23	460	
Ma-054	梯左仲左	番外	御水主頭	150	10	20	200	
Ma-055	中村源七				10	20	200	
Ma-056	内海道安	番外医師		70俵	16	20	310	
Ma-057	金子六右衛門	番外	無役	50石5人扶持	10	20	200	
Ma-058	永田市郎左衛門	番組	御祐筆	100	10	20	200	
Ma-059	村越治太夫				10	20	200	
Ma-060	宮塚三右衛門				8	15	120	
Ma-061	中村閑五				8	15	120	
Ma-062	河村市二				8	15	120	

表2 正徳4年の絵図にみられる屋敷地の居住者と規模および家格、役職と禄高 (その2)

	Ma-063	山形半助				15	20	300
	Ma-064	加藤忠兵衛	番外	御近習目付	100	18	15	270
	Ma-065	跡部多助	猪役人	御膳付	15石3人扶持			
	Ma-066	茂木清太夫	番組	御番頭	20石4人扶持	18	15	270
	Ma-067	大河原金左衛門	番組	家老祐筆	20石4人扶持	8	25	200
	Ma-068	石川金吾	番組	御金奉行納方	20石4人扶持	8	25	200
	Ma-069	田部奥左衛門				8	25	200
	Ma-070	澤田糸右衛門				8	25	200
	Ma-071	大谷傳七	番組		20石4人扶持	8	25	200
	Ma-072	伊藤助十郎	番組		20石5人扶持	8	25	200
	Ma-073	芦田八郎左衛門	番組	御代官	23石4人扶持	19	20	380
	Ma-074	村田理左衛門				10	20	200
	Ma-075	平井三左衛門	番組	中奥付	20石5人扶持	10	20	200
	Ma-076	村尾武太夫	番組	御武具奉行	20石5人扶持	10	20	200
	Ma-077	長野玄達				14	20	280
	Ma-078	伊藤惣八	番組	御馬別当	20人扶持	8	20	160
	Ma-079	岡嶋龍左衛門				8	20	160
	Ma-080	酒井金五左衛門				7	20	140
	Ma-081	小林権次				7	20	140
	Ma-082	青畑龍右衛門				7	20	140
	Ma-083	三上衛士	番組		25石4人扶持	10	20	200
	Ma-084	雨森藤右衛門	番組		100	13	20	260
	Ma-085	高屋儀右衛門	番組		50	13	18	232
	Ma-086	相沢八郎右衛門	番組		200	22	25	550
	Ma-087	白石雪水	番組		250	20	25	500
B	Ma-088	尾高治部衛門	番外	寺社町郡奉行	250	18	25	450
	Ma-089	猪子三郎左衛門	番組	中頭	100	12	25	300
	Ma-090	一柳金七	番組		100	12	25	300
	Ma-091	桧原専右衛門	番組		17石4人扶持	8	25	200
	Ma-092	高久富太夫	番組		25石5人扶持	8	25	200
	Ma-093	森田勘助	番組		100	16	25	400
	Ma-094	中村庄助	番組		20石5人扶持	12	27	318
	Ma-095	雨森三右衛門	番外	御奏者見習	60儀5人扶持			0
	Ma-096	藤田宗繁	番組医師	御茶乃御坊主頭	15石5人扶持	14	27	371
	Ma-097	田川友右衛門	番組		17石4人扶持	18	26	468
	Ma-098	波々伯部与八	番組	御祐筆	20石4人扶持	17	15	255
	Ma-099	蛭川三五右衛門	番組		100	14	15	210
	Ma-100	長崎藤四郎				12	25	300
	Ma-101	市村喜六	番組		20石4人扶持	8	15	120
	Ma-102	久野忠左衛門	番組	小納戸御腰物	12石3人扶持	15	15	225
	Ma-103	岡谷早太			17石4人扶持	17	15	255
	Ma-104	上坂興七	番組		20石5人扶持	8	15	120
	Ma-105	山本仁左衛門	小役人	中奥付	12石3人扶持	8	15	120
	Ma-106	加藤清兵衛		御勘定方吞込	22石4人扶持	8	15	120
	Ma-107	武沢大七	番組		17石4人扶持	15	15	225
	Ma-108	岡部甚太夫				14	25	343
	Ma-109	村井惣助	御小人	御料理	15石3人扶持	8	15	126
	Ma-110	山岡弥左衛門				9	15	135
	Ma-111	千原儀左衛門				10	15	150
	Ma-112	岩佐瑞雲	番組医師	番組医師	15石5人扶持	8	14	107
	Ma-113	御歩行				7	14	98
C	Ma-114	坂巻十右衛門			25石5人扶持	10	25	250
	Ma-115	神戸六左衛門	番外	御長柄奉行	150	21	15	315
	Ma-116	森沢治左衛門	小役人	御料理	13石3人扶持	14	15	210
	Ma-117	田辺五太夫	番組	奥御小姓	150	25	16	400
	Ma-118	牧野嘉兵衛	番組	御作事奉行	20石4人扶持	8	25	200
	Ma-119	吉倉源次	番組		10石4人扶持	8	25	200
	Ma-120	山口達右衛門	小役人	御料理	12石3人扶持	8	25	200
	Ma-121	高木戸作				8	25	200
	Ma-122	久津見庄蔵	番組	大納戸	20石4人扶持	12	14	168
	Ma-123	沢木所右衛門	番組		100	33	24	792
	Ma-124	片山弥五右衛門	番外	御目付	200	16	30	465
	Ma-125	河合彦作	番外	御徒頭	100	15	30	435
	Ma-126	成瀬藤次郎	番組		20石5人扶持	15	30	428
	Ma-127	諸木野半太夫	番組		20石10人扶持	29	14	406

3.2.1. A区画 (35筆)

城下中心部のA区は、御館の東側および南側から西側にかけての1重目の堀沿いの大名町にある12筆(Ma-1~3, Ma-8~16)と、大名町の一筋南側の通りに面する18筆(Ma-17~35)、大手門から御館に通じる通り(南北方向)沿いにある2筆(Ma-6~7)の計32筆の武家屋敷地がある。

1重目の堀沿いの大名町には、番外の中でも「家老・城代」に就ける5家のうち中根勘負家(Ma-3)、秋田八郎兵衛家(Ma-9)、明石縫殿家(Ma-10)、松原傳右衛門家(Ma-16)など4家の屋敷がある。この他、御館の東側に磯野多宮家(Ma-1)、渋谷弥祝家(Ma-2)が並び、南側に浅井源左衛門家(Ma-13)、前波丹下家(Ma-14)、西側に蜷川七郎兵衛家(Ma-15)など番外の屋敷が御館を囲むように配されている。

大名町の一筋南側の通り沿いの屋敷地は、通りを挟んで北側に9筆、南側に10筆ある。北側の屋敷地は、雨森傳右衛門家(Ma-25)、青山登家(Ma-26)や横田兵蔵家(Ma-20)など番外4家と奈良助左衛門家(Ma-23)と菌田七郎(Ma-23)の番組2家のほか、一部御徒の生駒比箇家(Ma-18)や樋口養心(Ma-19)が混在している。

一方、通りの南側には、秋田勘解由家(Ma-26)、久世少吉(Ma-28)、出浦宮内左衛門(Ma-29)ら番外5家と、番組の木村丹治家(Ma-33)や栗田七郎右衛門家(Ma-34)の屋敷が配されている。

このように、A区は32筆中20筆が番外の屋敷地であること、御館に近い大名町は家老の中根勘負家をはじめ、城代の雨森傳右衛門家や明石縫殿家などが集中していること、A区に屋敷地を与えられている番外の禄高は200石を超える家が多いことなどが指摘できる。

また、御館の南側、町人地に通じる南北方向の通りには、会所(Ma-4)が設けられており、この場所は松岡城下のほぼ中央にあたる。

3.2.2. B区画 (78筆)

B区は、A区の東と西の外側に配されている武家屋敷地を指す。西側に49筆と東側に29筆あり、武家屋敷地127筆全体の約6割を占めている。西側には佐々木小左衛門家(Ma-50)や中川主膳家(Ma-51)など9筆の番外の屋敷がみられるが、番組の屋敷が20筆と多く、そのほとんどが禄高20石前後の家である。それ以外の19筆の居住者の名前は、『松岡様御給帳』には記載されてなく、家格や禄高を特定することはできない。

対する東側は、29筆の武家屋敷地が配されている。御館の二筋東側にある代官町は、通りの東側にある尾高治部衛門家(Ma-88)と雨森三右衛門家(Ma-95)の番外2家以外は、すべて番組の屋敷が配されている。

代官町の一筋東側、二重目の堀沿いにある屋敷地も、12筆のうち7筆が番組の屋敷地である。番組に属しているが、白石雪水家(Ma-90)の禄高は250石で、相沢八郎右衛門家(Ma-89)は200石、猪子三郎左衛門家(Ma-92)と一柳金七家(Ma-93)と森田勘助家(Ma-96)の3家は100石であり、これら5家は番外に匹敵する禄高を有している。

一方、土居の外側、町人地と接する東端隅の一画には5筆の武家屋敷地があり、番組医師の岩佐瑞雲(Ma-112)、村井惣助(Ma-109)の屋敷が確認できるが、番外あるいは番組の屋敷地は1筆もみられない。

したがって、A区の外側にあるB区は、番組の屋敷地が多く配されていることから、中級武家の居住区と認められる。

3.2.3. C区(新町) (14筆)

C区は武家屋敷地の西端の一画を指し、新町と呼ばれていた。ここには武家屋敷11筆があり、番外の片山弥五右衛門家(Ma-124)や河合彦作家(Ma-125)、番組の田辺五太夫家(Ma-117)や牧野嘉兵衛家(Ma-118)や諸木野半太夫家(Ma-127)らの屋敷地が通りの両側に配されている。11筆のなかには、小役人の山口達右衛門家の屋敷地も確認できる。

新町は前述したように、後世に整備された武家町であり、番外や番組のほか、小役人が混在する区域である。

4. 屋敷地の大きさについて

4.1. 間口と奥行

表2に示すように、127筆中、間口が最も大きい屋敷地は46間で番外の松原郷左衛門家である。これに次ぐのが、間口44間の白石要人家、片山与三右衛門家が34間で続いている。その他、10間未満が32筆、10間以上～20間未満が58筆、20間以上～30間未満が24筆あり、間口は全体の約9割が7間～29間である。

奥行をみると、最も大きいのは奥行50間で番外の中根勘負家である。次いで渋谷弥祝家が34間、磯野多宮家が32間で続き、30間が片山弥五右衛門家と河合彦作家の2家である。奥行30間を超えるのはこれら5筆のみで、他はすべて10間代～30間代である。なかでも、奥行25間の屋敷地は47筆と多い。

4.2. 面積(坪数)

面積が最も大きい屋敷地は番外の中根勘負家(500石)の1750坪である。これに次ぐのが、同じ番外の渋谷弥祝家(300石)の1224坪、白石要人家の1100坪および番外の松原郷左衛門家(400石)の1090坪である。これに対して、最小は120坪で宮塚三右衛門家や中村閑五家など3家である。

家格ごとに、番外の坪数は400坪以上～600坪未満が15筆あって最も多く、次いで200坪以上～400坪未満が10筆、600坪以上～800坪未満が4筆である。その他は、1000坪を超えるのは3筆である。したがって、番外の屋敷地の大きさは1000坪を超える3筆を除いて、概ね200坪～650坪とみてよい。

番組をみると、46筆が200坪以上～800坪未満に含まれている。最も多いのは200坪以上～400坪未満で30筆ある。これに次いで400坪以上～600坪未満が10筆で、100坪未満が5筆、600坪以上～800坪未満が1筆ある。しかし、番外のように1000坪を超える屋敷地は1例もない。

以上のように、家格や禄高が上位である番外のほうが広い屋敷地をもつ家が多い傾向がみられる。すなわち、屋敷地(面積)の大小は、家格や禄高の高低と強い関連性が窺える。

5. おわりに

以上、松岡城下における武家屋敷地の分布について検討した結果、松岡城下の武家屋敷地は、藩主の御館を囲むように配され、土居や堀によって町人地と区分されていた。

御館の東側と南側から西側にかけての1重目の堀沿いの大名町を含む城下中心部のA区は、松岡藩士のなかでも最上位の番外藩士の屋敷地が占めていること、A区の東と西の外側にあるB区は、そのほとんどが番組藩士の屋敷地であったこと、C区は新町と称され、慶安2年の城下創設期にはなかったことなどが指摘できる。

このように、家格や身分によって居住区が分けられていることは、これまでみてきた福井城下も同じ形態を示している。

一方、屋敷地の大きさについては、家格や禄高が上位である番外藩士の方が広い屋敷地が与えられ、身分や禄高が低くなるに連れて屋敷地も小さくなる傾向が窺える。これについても、福井城下の武家屋敷地の屋敷割と共通している。

注

- (1) 松岡藩の沿革や概要については、福井藩の正史である、福井県立図書館、福井郷土誌懇談会共編、“国事叢記 上”，(1961)、福井県立図書館、福井郷土誌懇談会共編、“片叢記・続片叢記”，(1955)、および、野村英一、“松岡町史上巻”，(1978)、などを参考にしている。
- (2) 前掲1、野村英一、“松岡町史 上巻”，(1978)、pp.208-223、所収、松岡町。
- (3) “松岡家中絵図”，松平文庫、福井県立図書館保管。
- (4) 前掲1、“松岡町史 上巻”，参照。
- (5) 伊豆蔵庫喜，“上級武家屋敷地の大きさの比較”，(2004)、pp.248-251、日本建築学会北陸支部研究報告書第47号。

- (6) 前掲1, “片龔記 中”, p411, に「一, 承応二巳年 松岡館勝手次第普請可レ 仕旨松平伊豆守奉りを以被二仰出一, 御館坪敷七千七百八拾坪侍屋舗百八拾軒.」および「同閏六月十九日松岡大手口園出来.」および「同三午年六月廿三日江戸より御入部」とある.
- (7) 前掲1の“『片龔記 中』”の史料として印刷されたものが所収されている.
- (8) 享保期の城下図はすべて, “松岡家中絵図”, 松平文庫, 福井県立図書館保管.
- (9) 前掲6, 参照.
- (10) 松岡城下における屋敷割の規範については, 前掲1の“片龔記 中”, pp408-410の「御家中屋舗割 慶安二己丑九月御家中屋舗割被二仰付一」の条, および, 吉田純一, “松岡城下の屋敷割”, (1990), 北陸都市史学会誌第1号, を参考にしている.

(2019年4月26日受理)